第７回　家活グランプリ総評・入選作品講評

審査委員長　北川　太一（摂南大学農学部 教授）

総評

ＪＡの教育文化活動は、『家の光』をはじめとする「家の光三誌」を積極的に活用しながら、女性組織や支店での協同活動を展開することによってＪＡ、組合員、地域とのつながりをつくり、ＪＡの事業や活動、組合員の拡大など組織の根を広げていくことをめざしています。第７回となる家活グランプリですが、今回はコロナ禍による規制の緩和が進められてきたなかでの事例もみられました。とはいえ、まだまだ多くの制約があるため、コロナ禍でも前向きな姿勢で創意工夫をおこない、仲間と協力しながら取り組む実践事例が依然として多く寄せられました。３人の審査委員により、①組織・地域の特性を踏まえて、創意工夫して「家の光三誌」の記事を活用しているか、②教育文化活動や記事活用の効果と広がりがみられるか、③豊かな表現力で活動内容が表されているかを評価の基準として、１２の作品を対象とした審査がおこなわれました。厳正な審査の結果、以下のように各賞を決定しましたが、いずれも甲乙つけがたい力作ぞろいで、惜しくも今回の選には漏れた作品からも多くのヒントが得られました。このような実践事例に学びながら、家活の輪がますます広がることを期待しています。

最優秀賞

対話からその先へ

愛知県ＪＡあいち中央　安城北部ブロック
坂田　由里子さん

優秀賞を受賞された昨年度の組織活動のキーワードである「対話」をさらに発展させて、今年度は「つなぐ」と設定し、「人と人」「人とＪＡ」をつなぐことを意識した活動を進めた坂田さん。三つの活動からつなぐことの実現をめざしました。一つめは、ＪＡが取り組む「フレミズの森」の会員増加に向けた、ランチプレート、苔玉、飾り巻きずし作りなどの活動です。会員外にも積極的に声かけを行った結果、９人の増員を果たしました。二つめに、単なるカルチャー教室には終わらせない、アクティブ・メンバーシップの確立をめざした参画型の活動です。グループワークを取り入れるなどの工夫を行うことで、自分たちで考え企画する雰囲気づくりに結びつけました。三つめは、ＳＤＧｓを意識した『家の光』を活用した取り組みです。支店職員の朝礼スピーチでも記事が紹介されるようになり、新規購読獲得実績は１９冊という実績をあげました。家活がつなぐ力を生み、〝わたしたちのＪＡ〟という意識を高めることを教えてくれる内容です。

優秀賞

～私たちの再出発。ヒントは『家の光』から～

神奈川県ＪＡあつぎ　睦合支所　経済課

野田　奈緒さん

２０２０年４月、コロナ禍から生活指導員の業務がスタートした野田さん。不安と戸惑いのなかで例年の活動を見つめ直し、引き継いだデータファイルに目を通すことで、「女性部員に楽しんでもらう講習会や旅行の企画をしたい！」と決意。コロナの影響で企画の延期・中止が繰り返されたため、「コロナ禍だからこそできること」に注目しました。『家の光』から多くのヒントを得て、キットの購入のみで出向かなくても講習に参加できる、生活指導員自らが講師となって女性部の会合に出向くなどの工夫をしました。ＳＤＧｓに関する『家の光』の連載も活用しながら、「飢餓をゼロに」「つくる責任、つかう責任」を目標に食料品や雑巾寄贈の取り組みも進めたことは、組合員、職員、地域住民の関係性を築く足掛かりになったと手ごたえを感じています。新しく担当になってどのように取り組んだらよいのか、多くの示唆が得られる作品です。

優秀賞

進化する女性部

静岡県ＪＡ遠州夢咲　組合員ふれあい室

飯塚　容子

コロナ禍の影響で、女性部の活気が失われていると感じた飯塚さん。「女性部員に元気を！」「女性部活動に活気を！」を合言葉に、「女性組織検討委員会」を立ち上げたところ、２つの課題が明らかになりました。一つめは、『家の光』が有効に活用されていないこと。ページを開いてもらうために、「家庭でできるＳＤＧｓ」のチラシを毎月発行し、クイズを出題してプレゼントも用意したところ、多くの応募があり新たな購読者も生まれました。二つめは、女性部活動をもっと対外的にＰＲすること。既存の広報誌やチラシだけではなく、ペーパーレス、デジタル化に目を向けて、県内で初めて女性部だけの公式ＬＩＮＥを開設。すぐに登録者は３００人を超え、ＪＡ全中のスマホ教室や『家の光』連載の「スマホ道場」も活用したところ、地域の枠を越えた活動の広がりが見られました。みんなで課題を明らかにし、その解決に向けた活動を展開することの重要性が、わかりやすい文章で表現されています。

佳作

『家の光』×ＳＤＧｓ　楽しく学んで広がる活動を目指して

岩手県ＪＡ江刺　総務部　組合員くらしの活動課
及川　春香

女性部の活動はすべてＳＤＧｓにつながっている、にもかかわらずＳＤＧｓについては職員も含めて理解している人が少ない。このことを課題に感じた及川さん。ＪＡとＳＤＧｓの関わりについて、現場を取材しながら社内報の連載としてまとめました。この経験を活かして、『家の光』の普及担当になってからは、ＳＤＧｓと手芸を組み合わせた「『家の光』×ＳＤＧｓ　ハンドメイドで学ぶＳＤＧｓミニ講座」の企画を立てました。ＪＡ管内であれば、組合員資格や年齢、性別を問わないという条件で募ったこともあり、多くの参加者が集まりました。講座参加者が発起人となった支部活動も開催されるなど、ＪＡや女性部の活動がＳＤＧｓと深く関係していることを伝えること、それが『家の光』の魅力を伝えることにもつながることを教えてくれる作品です。

佳作

『家の光』で「ちむどんどん」

福井県ＪＡ福井県　文殊支店
大橋　奈津実

ＪＡが実施する「家の光ディスプレイコンテスト」に、大橋さんが所属する支店も取り組みました。前年の反省を踏まえて、より多くの人に見てもらえるように支店併設の営農センターを活用し、手書きのＰＯＰを添えるなどの工夫を施して展示を行うことで、好評を得ました。この経験を活かして、翌年には家の光記事活用グループ「ちむどんどん」を結成。とくに、フレミズを対象に力を注いだ結果、活動を重ねるごとに興味や関心が広がり、活動が活発化するとともに、メンバーの増員、『家の光』購読者の増加につながりました。これからは、若い人たちに『家の光』のよさを理解してもらう努力をする必要があること、そのためには、組合員や地域の人たちに“見える化”しながら、『家の光』記事活用グループを作り活動を進めていくことの有効性が伝わってきます。